



子どもの熱中症の特徴と予防

★子どもが熱中症になりやすい理由

- ①大人より暑さに弱い:汗をかく能力が未熟で、体重に対して体表面積が大きいことから、周囲の環境の影響を受けやすいため、子どもは熱しやすく冷めやすいという特徴があります。
- ②照り返しの影響を受けやすい:身長が低いので地面からの照り返しを受けやすく、大人の顔の高さで32℃のとき、子どもの顔の高さでは35℃程度の感覚だといわれています。
- ③自分では予防できない:自らの体調を訴えられないので、周りの大人の気づきと手助けが必要です。

★熱中症を防ぐポイント

①顔色や汗のかき方を十分に観察しましょう

子どもの顔が赤く、ひどく汗をかいているときは、深部体温がかなり上昇していると判断して涼しい環境下で十分な休養を与えましょう。こまめなイオン飲料、経口補水液などの水分補給も忘れずに。

②熱や日差しから守りましょう

涼しい服装、帽子の着用。少しでも体調が悪ければ涼しい場所へ移動しましょう。

★病院を受診するタイミング(①、②は自家用車で、③は救急車で)

- ①口から水分を補給することができない
- ②様子を見ていたが症状が改善しない
- ③高熱、意識障害、けいれんがあるときは、救急車を呼んでください。



乳幼児は車内熱中症に注意

JAFの実証実験によると、気温35℃の炎天下に駐車した車内の熱中症指数は、わずか15分で人体にとって危険なレベルに達したそうです。2004～2018年の米国の小児熱中症の死者数の半数以上が車内熱中症が原因だったという衝撃的な報告もあります。子どもは環境に合わせて服を脱いだり、飲み物を飲んだりできません。わずかな時間でも車内に子ども置いておくことはNGです。

【車内の熱中症対策】

- ①車から離れるときは子どもを必ずつれていく。
- ②停車中はすべて車の窓を少し開けておく。
- ③停車中はサンシェードを!
- ④チャイルドシートにもサンシェードをかける。
- ⑤保冷シートの利用や車内扇風機の設置をする。

6月の感染症情報

6月中旬まで感染性胃腸炎が流行していましたが、その後下火となりました。6月中旬からはRSV感染症が流行し始めました。未就学児で咳が次第に増悪するときはRSV感染症の可能性がります。地域の流行状況にご注意ください。



6月の利用状況

6月の利用延べ人数は70名で、1日の平均利用人数は3.2人でした。年齢別では1歳児が31人で最も多く、次いで2歳児の13人でした。疾患別では急性上気道炎が42人で最も多く、そのほかには喘息性急性気管支炎、感染性胃腸炎、アデノウイルス感染症、RSV感染症などがありました。

6月下旬から県内の新型コロナの感染者数が増加に転じてきていますが、小児は熱中症を防ぐために屋外でのマスクははずすようにしましょう(厚労省)。